



＜同志社人が母校を誇りに思える情報＞

「同志社ファン・レポート」(通巻 278 号)

「教育者・新島襄」 -3-

アーモスト・カレッジ

井上勝也同志社大学名誉教授



アーモスト・カレッジでの三年間は、新島にとって彼の人間観・教育観、そして大学観の形成に最も重要な時期であったと考えます。一八二一年創立の当大学はピューリタン、とりわけ会衆派教会の人々のための高等教育機関でありまして、先程のフィリップス・アカデミーと同じく、学内で屢々宗教行事がおこなわれ、時代や社会が大きく「金ぴか時代」(Gilded Age)に向いつつある中で、大学全体がピューリタンの伝統を堅持しようとする姿勢がうかがえます。新島時代のカリキュラムを見ますと、その特徴は各学年を通じて演説法と体育が必修であり、アーモスト・カレッジは体育と衛生学の学科を最初に導入した大学であります。

内村鑑三のアーモスト・カレッジ体験

さて、内村鑑三(一八六一～一九三〇)は新島の斡旋で一八八五(明治一八)年から八七(明治二〇)年までアーモスト・カレッジで学ぶことができました。彼は『余は如何にして基督信徒となりし乎』や『流竄録』^{りゅうざんろく}で、アーモスト・カレッジでの学問体験を詳しく述べていますが、彼はとりわけシーリー(J.H. Seely)総長からの人格的・学問的影響が大きかったことを強調しています。『余は如何にして基督信徒となりし乎』の中で、

総長先生彼自身にまさって余を感化し変化させたものはなかった。彼がチャペルで起立し、讚美歌を指示し、聖書を朗読し、そして祈ることで十分であった。余は尊敬すべき人を一目見るといっただ一つの目的のためにも、けっして余のチャペル礼拝を『カットした』(すなわち欠席した)ことはなかった。彼は神を、聖書を、またすべてのことを成就する祈りの力を、信じた。あの聖なる人が祈っているときに自分たちのラテン語のレッ

スン勉強したあの無邪気な連中は、天国に行って彼らの行為を悔いるであろうと思う。余には、一日の戦闘に備えるために彼の澄んだ響きわたる声にまさる何ものをも必要としなかった (pp.157~158 岩波文庫)。

と書いています。『流竄録』^{りゅうざんろく}ではシーリー総長が屢々学生に“Amherst aims to teach its student how to think for himself.”と語ったと述べ、ひきつづいて、

教育の目的を以て事実の暗誦にありとするは誤謬の最も甚だしきものなり。吾人は学問せんが為めに学校に行くにあらずして学問する法を学ばんが為めに行くなり (『内村鑑三全集』 3p.80 岩波書店)。

と述べています。彼にとって「教育の目的たる畜に實際的人物を作るにあらずして、畜に専門家の製造にあらずして、広量ある批評力、温雅なる風采、聡敏なる観察力の涵養」(同上 p.79)にある、と考えるからであります。このシーリー総長はまた学生の自主性・主体性を培う意味から、彼らの自治組織を重んじ、大学における教学上の問題についても学生と協議していますが、このアーモスト・システムと呼ばれる制度の採用は、アメリカの大学の中でアーモスト・カレッジが最初であります。アーモスト・カレッジの歴史について書かれた書物には、シーリー総長の次のようなエピソードが紹介されています。即ち、或る学生が将来牧師になるために必要なヘブライ語を選択すべきか、化学(chemistry)を選択すべきかについてシーリー総長に相談に来ましたときに、彼はその学生に化学をとるように、次のようなアドバイスをしたということです。

もし君が牧師になるのであれば、今君が必要なものはヘブライ語ではなく、化学である。ヘブライ語はとにかく後年とらねばならないだろう。しかし今化学をとる最後のチャンスである。君の牧師在職中に全ての他の科学を根本的に変革する化学の進歩があるだろう。

我々が化学を課しているのは君の生涯を通してこの問題に関して君を聡明にするためである (C.Fuess, Amherst :The History of a New England College, p.218)。

このエピソードが示しておりますものは、牧師であり、心理学と道徳哲学の教授であったシーリー総長の将来的展望の確かさと、学問的幅の広さでありましょう。一八八〇年代のアメリカは工業の急激な発展を見る中で、工業の発展を支える化学の影響力を見抜き、牧師といえども最先端の科学や技術を理解することが必要であり、且つ化学の知識を充分持たねばならないことを強調しているのであります。■